

——ヒロさんを誰にも渡したくない

これは野分が常々感じていたことだった。しかしこ
こはお互いにいい大人である身、故に嫉妬の欠片が言
動の端々に現れることはあったとしても、そのことを
直接口に出すことは決してなかった。ないように心掛
けていた。

真っ直ぐ弘樹に伝えるのは精々『早く会いたい』程
度のことで、それ以外の、到底誰かに見せられるもの
ではないどころとした醜い感情は、全て野分の心の
内へと仕舞い込まれていった。

——俺は、ヒロさん以外に好きになる人はいない

野分の偽らざる想い。透明で純粹な愛情はまっすぐ
弘樹に伝えられ、弘樹も不器用ながらもそれに応えて
くれる。自身の一方的な片想いから始まり、加えてか
の想い人は『他の誰か』を想っていた当初。出逢った
頃とは比較するまでもなく、野分は幸せと感じられる
日々を過ごしていた。

しかし、心の奥底に日々降り積もってゆく仄暗い想
いは、野分の自覚せぬうちに少しずつ深化していった
のだろうか。

已ですら気付かぬ意識の其のまた下で、不安定にゆ
らゆらと揺れているのは熱く煮え滾るマグマか、それ

とも凍える海の流水か。

コポリ、コポリ。

澱んだ灰色のそれは、或いは汚泥かもしれぬ。水面
は静かに密やかに、しかし確実に何らかの力を秘め、
不気味に蠢いていた。

——ヒロさんは自分で何でもできる人だから、本当は
俺なんかいなくてもやっていける人だから……だから
他人に甘えたりしないのは分かっているけれど

野分は静かに目を伏せる。

——ねえ、このままヒロさんを誰にも渡したくない
心に根深く巢食っている想いは底なし沼のようで、
それは次第に形を為し、やがては弘樹の身体を捕える
ための無数の腕となった。

* * *